

研究課題 83

トランスナショナルな視点からの「人種」概念の変遷の研究： ヨーロッパ・アメリカ合衆国・東アジアにおける相互影響

I トランスナショナル・エスニシティ研究の展望

英文学科 馬場 聡

本研究グループは、国民＝国家の枠組みに基づく文学史／文化史の枠組みを超え、越境・混成・翻訳等のプロセスを重視する批評的パラダイムのもと、人種概念の構築に関する調査研究を進めている。これまでの文学系エスニシティ研究では、作家や作品はしばしば「アメリカ文学」「日本文学」「ドイツ文学」「中国文学」といった蜻壺状のカテゴリーの内部に位置づけられてきた。しかし、グローバル化とディアスポラの移動の時代において、文化実践は単一の国民文化に回収できない複層的な回路の中にある。こうした現実を捉えるために、われわれは国境を越える語りの力学や、複数の文化コードが交錯する場としてのテキストに注目する。

各研究員はそれぞれの専門領域から、異なる文化圏・時代・メディアにおける「人種」表象についてリサーチを進めている。杉山直子は19世紀以降のアメリカ文学に焦点を当て、「黒人」という概念の変遷過程を探る。大場昌子はユダヤ系アメリカ文学における「ユダヤ人」表象を通じて人種概念の変化を考察する。奥波一秀はナチ・ドイツ期の「ユダヤ人」問題が日本でいかに受容されたかを、音楽家である山田耕作の言説を手がかりに分析する。三田明弘は中国の伝奇小説や民話に見られる異人種表象をたどり、東アジア地域の人種観への影響を検証する。馬場聡はアメリカン・コミックスにおけるアジア系キャラクター表象を通時的に分析し、大衆文化における人種観の変遷を探究する。学外研究員の田村円はホロコースト後の在独ユダヤ人に焦点を当て、ドイツ＝ユダヤ共生をめぐる議論を包括的に検討する。

本研究は、こうした個別研究の成果と公開研究会／講演会に招聘する当該分野の第一人者の知見を横断的に結びつけることで、国家・言語・民族といった固定的カテゴリーを越えたトランスナショナル・エスニシティ研究の新たな地平を開くことを目指している。グローバルな視座から「人種」概念の多層性を明らかにすることはもとより、文学・音楽・ポップカルチャーを横断する学際的なアプローチにより、人種表象の問題をより包括的に捉えるための理論的基盤を提起できればと考えている。本研究プロジェクトを通して、科学的には否定されて久しい〈人種〉という概念が今なお一定の社会的影響力を保持し続けている理由を解明することが最終的な目標となる。

Ⅱ ユダヤ系アメリカ人作家における「ユダヤ系」という問題

英文学科 大場 昌子

19世紀末から20世紀初頭にかけて、東欧やロシアのユダヤ人が迫害を逃れるためにアメリカ合衆国に多数移住した。彼らは移民第一世代としてキリスト教圏の米国でアメリカ文化への適応に様々な困難を抱えながら〈アメリカ人〉として生活するために奮闘した。その子どもである第二世代は、両親や親族が家ではイディッシュ語¹⁾やロシア語を話している一方で、英語で教育を受け、生まれたときからアメリカ社会で日常生活を送るという二重の文化環境にあった。

その第二世代にあたる作家たちが第二次世界大戦後に一躍脚光を浴びることとなり、アメリカ文学の中に、「ユダヤ系アメリカ文学」というカテゴリーが認知された。この点について、『ユダヤ系アメリカ文学の興亡:エスニック研究とアイデンティティの問題』(2020)の著者ベンジャミン・シュライアーは、「研究者たちが自らの研究を『ユダヤ系アメリカ文学』と呼べるものだと認識し始めたのは、1960年代後半から70年代初頭になってからであった²⁾と説明している。

このように、当時新興のユダヤ系アメリカ文学は、1976年にソール・ベロー、1978年にアイザック・B・シンガー(イディッシュ語での作品を英語で翻訳出版)がノーベル文学賞を受賞したことで、アメリカ文学の^{いち}一カテゴリーとして堅固な位置を確立することになる。

他方、自身ユダヤ系の文芸評論家アーヴィング・ハウは、移民第二世代が活躍した1970年代がユダヤ系アメリカ文学興隆のピークであり、その後については悲観的との見解を70年代後半に示し、後続の作家および研究者たちはハウの見解の当否を強く意識しながら創作活動を行い、現在に至っている。

本研究では、ポスト移民世代のユダヤ系アメリカ人作家が、自身が継承するユダヤ文化を作品においていかに表現しようとしているのか、彼らの創作上の特徴の一端を探っていく。

1) 高地ドイツ語方言にヘブライ語、スラブ系の言語が混ざったもの。

2) Benjamin Schreier, "The Origin of Jewish American Literary Studies," *Marginalia*, February 11, 2022. <https://themarginaliareview.com/the-origins-of-jewish-american-literary-study/>

Ⅲ 唐代伝奇における異民族のイメージ——異民族像の背後にある中国知識人の意識

国際文化学科 三田明弘

1. 研究テーマ

唐は中国歴朝の中でも日本人にとって特に馴染みの深い王朝であるが、隋唐の支配層は、鮮卑族系の人々であった。そして首都長安は石田幹之助『長安の春』(創元社、1941年)に描かれるように、シルクロードを通過してやってきた様々な民族が共存する人種のるつぼであった。

多民族国家であり、少数民族が漢民族を支配することもしばしば起きた中国において、知識人にとって異民族とはどのような概念であったのかを探るのが、この研究のテーマであり、具体的な方法としては、唐代伝奇と呼称される当時の新形式の小説群の中に描かれる異民族の形象を分析する。

2. 唐代伝奇『崑崙奴』を読む

崑崙奴とは、東南アジアや南アジア、あるいはアフリカから連れてこられた黒人の奴僕を指す言葉である。唐代伝奇の代表作の一つである『崑崙奴』は、崑崙奴の磨勒が、主人である貴公子の恋を成就させるため、頓智と超人的な体術を駆使して、警備の厳重な高官の館に囲われている女奴隷を連れ出し、二人を駆け落ちさせるという内容である。怒った高官は磨勒を捉えようとするが、遂に捕縛することは出来なかった。女奴隷は、朔方（オルドス地方）の富裕な家の娘であったが、高官の朔方征討の際に奴隷にされてしまったという出自であり、物語の背景には唐と周辺民族との紛争があり、高官は名将として知られる郭子儀がモデルであるとの説もある。磨勒の人物形象は、『史記』刺客列伝以来の「義侠」の系譜に位置づけられ、それは『水滸伝』の一〇八将や、金庸の武侠小说へと継承されてゆく。常人を超えた力を持つ周縁的存在が中央の権力を脅かすという構図が、荊軻による始皇帝暗殺未遂以来、各時代特有の意匠を帯びて反復され、国際都市であった唐代の長安においては、「異民族」がそのイメージの一端を担ったとも言えよう。その「異民族」とは、支配層である鮮卑系貴族や漢民族などの既に何代にもわたって中国に定住している人々とは異なる文化背景を持つニューカマーとして意識された人々であったと考えられる。一方、ニューカマーがすべて周縁的存在であったのではなく、阿倍仲麻呂や安祿山のように朝廷の中枢にまで入り込んだ人々もいた。

3. 唐代伝奇『任氏伝』を読む

『任氏伝』は、狐の化けた美女と、そうと知りつつ夫婦として暮らした男の物語である。妻の任氏は、夫の恩人である貴公子のために、術や計略を使い、將軍の寵愛する家内奴隷との密会を手引きする。権力者の寵姫を盗むというモチーフは『崑崙奴』にも見られるものであり、異民族と異類のキャラクター的位相が共通していることを示している。任氏の家の前に胡人（中央アジア・中東の民）が食べ物の屋台を出していたり、任氏が故郷を甘肅省のあたりと言っている点にも、胡（こ）と狐（こ）が相通じることが示唆されている。

狐の美女と幽霊の美女は、中国文学史における重要な女性キャラクターであり、その形象は清代の『聊齋志異』において完成する。幽霊の美女が漢民族の儒教の伝統を背景とする存在であるのに対し、狐の美女は、南北朝期以降に進展した中国の多民族化によって異民族と異類のイメージが重なり、形成されていったのではないだろうか。

IV 山田耕筈と人種問題

国際文化学科 奥波 一秀

20世紀前半、アジアの日本から、「人種」問題はどのように見えていたか？ 音楽家・山田耕筈の言動を通して検討する。山田耕筈（1886-1964）は、ベルリン留学（1910-13）、アメリカ滞在（1917-19）、欧米視察旅行（1921）、パリ滞在与ソ連楽旅（1931）、ソ連楽旅（1933）、ドイツ滞在（1937）など、当時としては最も海外経験豊かな日本人のひとりであった。その耕筈は、太平洋戦

争末期、次のように記している。

前世界大戦によつて政治的に、また経済的に大きな役割を演じたアメリカは、その附帯物として、またその勢力の現はれの一つとしてジャズを全世界に蔓延させた。しかし、そのジャズ音楽の傳播者は決してその國々の健全な市民によつてではなかつた。それは常に悪魔的意慾のままに地上を慌しく駆けめぐるユダヤ人の手によつてであつた。(『音楽文化』1944.11)

アメリカ発祥のジャズ排撃、反ユダヤ主義的な陰謀論の露骨な表出は、アメリカなどの連合国を相手とする戦争の渦中のこととして理解可能だが、こうした考えはいつ、どこまで遡るだろうか。どのていど時局の必然だったといえるだろうか。ここでは、ベルリン留学時期の耕笹の見聞を検討し、西欧への劣等感をバネにした日本人としての意識の高揚、中国人との差別化、ユダヤ人への差別的視線の内面化（同調）の三点を確認していく。

1. ドイツ（西欧）への劣等感の裏面？

1910年、ベルリン留学中に日本の交友誌に送った報告文では、次のように記している。

音楽は勿論其他物質上の進歩に至りては驚くと共に学ぶべき事多くこれあるよう覚えそうらえども精神上に到りてはまるで空にそうろう。何等の学ぶべき点今日まで小生の眼には入り申さずそうろう。我利々々の群にそうろう。まるで動物園の如き感いたしそうろう。(4月8日付『音楽』1910.6)

念願かなつての音楽留学だったはずなのに、「何等の学ぶべき点」がない、「動物園」のようだと口吻は、若気のいたりとして見過ごせる限度を超えたものがある。コンプレックスの裏返しとして、「現今の日本の美風はいつまでも失はぬ様いたしたきもの」(同上)と、内向きのナショナリズムを表白していることも、注目にあたいる。

2. 中国人との差別化の意識

日本人としての自意識は、ベルリンの街中で「中国人」といっしょくたに扱われることへの反発にもあらわれている。

半ズボンの腕白小僧、さては馬方の権サン、ペンキの屋六公などに天晴大日本帝国の好男子を「ヒネーセ [Chinese]、ゝ」など云われながら、右手のスティックが「畜生何をぬかす」とぶるゝ武者ぶるいするのを、「此処は他所のお御客様遠慮なされ」と大人心が癩癩玉を抑えながら「汽笛一声」でも口の中でもごつかせて散歩している。(『音楽』1910.11)

ヨーロッパから見れば、中国・日本ともに「黄色」肌のアジア人だが、耕笹青年としては、中国

と同列とされることが気に入らなかった。こうした中国蔑視は、日清戦争以後の日本ではありふれたもので、とくに耕笹に特異なものではない。ただし、耕笹の場合、ヨーロッパにおいて中国蔑視の視線にさらされることで、自身は中国人ではなく日本人なのだという自己意識がことさら強化されたことがうかがえる。

3. ユダヤ人への視線

日本では直接目にする事のないユダヤ人について、ドイツ現地における偏見・扱いのようなものも、留学中に学びとった。

此處にいる人等は殆ど九一だ。(9 + 1 = Jew) 此のサナトリウムは世界でも胃腸病患者には屈指のそれだそう。生きるために喰う人は此家には一人もいないらしい、喰うために生きている人々計りだ。(『音楽』 1912.12)

ユダヤ人の退廃性にフォーカスすること、ジャーゴンで表現するところに、耕笹のバイアスが滲み出ている。のちにアメリカに滞在したときには、ユダヤ系のパトロンを見つけることになるが、ユダヤ人観にどのような変容があっただろうか。

ベルリン留学時に同調した「ユダヤ人」観の下地のうえに、ナチ政権の成立後、ユダヤ人への差別的な見方、排斥的な言動がますます表面化していったと想定できるが、アメリカ滞在時、さらにナチ政権時の耕笹の言動については、今後の課題としたい。